

[課題]

第2回課題 (1500字～2000字)

平成30年改訂の高等学校学習指導要領に示されている公民科教育の指導にあたっての「配慮事項」および「教育実践の課題」についてまとめなさい。

[本文]

平成30年改訂の高等学校学習指導要領の公民科教育の一番の特徴は、科目公共の新設である。主権者教育の柱として、国家及び社会の形成者としての必要な資質・能力を総体として育成するという役割を担うこととなった。¹

平成30年改訂の公民科の学習指導要領の内容の取扱いにあたっての配慮事項には以下の通りの記載がある。²

(1) 社会的な見方・考え方を働かせることをより一層重視する観点に立って、社会的事象等の意味や意義、事象の特色や事象間の関連、現実社会に見られる課題などについて、考察したことや構想したことを論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習を一層重視すること。

「国家及び社会の形成者としての必要な資質・能力」について、現実社会の課題について考え、説明し、議論する言語活動が必要であるとする。そうした一連の活動を主権者教育と位置付けている。

これまでの政治教育が若者の政治離れや投票率の低下をもたらせてしまった原因の一つに、教育基本法第14条が制限的に解釈されてきたことが挙げられる。同条の第1項で「良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない」と政治教育の重要性を謳っているにもかかわらず、第2項が「法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治活動をしてはならない」と政治的中立を要請しています。この2項が学校現場を抑制し、現代とは無縁の政治史や第三者的な政治思想ばかり教えるだけの政治教育が続いてきた。こうした知識だけの政治教育を根本から変えていくために、新科目「公共」が誕生した経緯がある。³

専修大学の岡田憲治は、高校生にとって必要な政治教育について、政治経済の知識を得ることではなく、学校の教室における主権者として、状況を冷静に判断し、行動する力が大切だとし、次のように述べる。⁴

(自分の現在の学校生活に) 不安や疑念、イラ立ちを抱えながら生きている人たちにとって、必要なのは「国民主権」だとか、「責任ある市民」だとか、そんなたいそうなお題目ではない。大事なのは、自分の身の安全や安心、つまり半径5メートルにおける安全保障の間

題だろう。(中略)半径5メートル、それは僕たちの日常生活の話だ。日常の生活空間で頭を抱えながらうずくまるのではなく、少しでも心穏やかに、安心して過ごすために、なにより政治学が役に立つ、ということ伝えたいのだ。

つまり、岡田はあくまで当事者という立場から、政治や社会を捉えていくことが求められるとされている。では、そうした主権者教育はどのように進めていけば良いのであろうか。学習指導要領の内容の取扱いに当たっての配慮事項に以下の記載がある。⁵

(2) 諸資料から、社会的事象等に関する様々な情報を効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付け現代の諸課題を捉え、多面的・多角的に考察、構想するに当たっては、関連する各種の統計、白書、新聞、地図その他の資料の出典などを活用したり、考察、構想の過程と結果を整理し報告書にまとめ、発表したりするなどの活動を取り入れるようにすること。

学習指導要領では資料の収集段階でも考察の段階でも「多面的・多角的」な視点にとりわけ重きが置かれている。⁶ただし、この点を意識し過ぎると、教育基本法第14条2項にみられる、抑制的な「中立」な側面が強調されてしまう。

文芸評論家の斎藤美奈子は、やや過激な口調で、高校生向けの政治学の著書の中で次のように述べる。⁷

だいたいみんな、このごろ、まちがえてんのよね。「偏らないことがいいことだ」「メディアは中立公正、不偏不党であるべきだ」「両論併記しないのは不公平だ」。そういう寝言をいつているから、政治音痴になるのよ、みんな。あのね、政治を考えるのに「中立」なんてないの。

斎藤は、「体制と反体制、資本家と労働者、右翼と左翼、国家と個人などの対立軸は、選挙に直接かかわる分け方ではありません。でも、それはあなたの立ち位置を決めるヒントにはなるはず」と述べ、あえて中立ではない立場に自分を位置付けることが大切だと述べる。さらに、斎藤は中高生にとって必要な主権者の資質について次のように述べる。⁸

基本はやっぱり私憤ないし義憤でしょう。なんでワタシがこんな目にあわなくちゃいけないわけ？ どうして彼や彼女がああいう境遇に置かれてるわけ？ そう思った瞬間から、人は政治的になる。その後の政治的リテラシーは勝手に磨かれていくだろうと思います。情報を集め、人と話し、本を読んで、ニュースも見る。結局そういうことの積み重ねしかないのですが、私憤や義憤と二人連れだと、おもしろいほどパワーが出る。すべてのスタートは「こんちくしょう」です。

これからの公民科教育の課題として、これまでの主権者教育が「第三者（傍観者）的な視点」

に偏りすぎてしまい、結局は若者の政治離れや投票率の低下を招いたことに対する総括が求められる。当事者としてまずは教室という狭い範囲からでも政治に関わり、やがては本やニュースで語られるような政治にも当事者として感情を露わにして関わるのが大切である。そうした真の公民科教育を目指したい。

文字数：2444 字

<引用・参考文献>

-
- ¹ 社会認識教育学会編『中学校社会科教育・高等学校公民科教育』学術図書出版会，2020，pp. 23 参考
 - ² 文部科学省『高等学校学習指導要領解説公民編』 2018，pp. 160 引用
 - ³ 18歳選挙権研究会監修『18歳選挙権に対応した先生と生徒のための公職選挙法の手引き』国政情報センター，2015，pp. 12-15 参考
 - ⁴ 岡田憲治『教室を生きのびる政治学』晶文社，2023，pp. 6-7 引用
 - ⁵ 同文部科学省前傾書，pp. 164 引用
 - ⁶ 社会認識教育学会編前傾書，pp.31 参考
 - ⁷ 斎藤美奈子『学校が教えないほんとうの政治の話』筑摩書房，2016，pp.205-206 引用
 - ⁸ 同上，pp.203，pp.207 引用